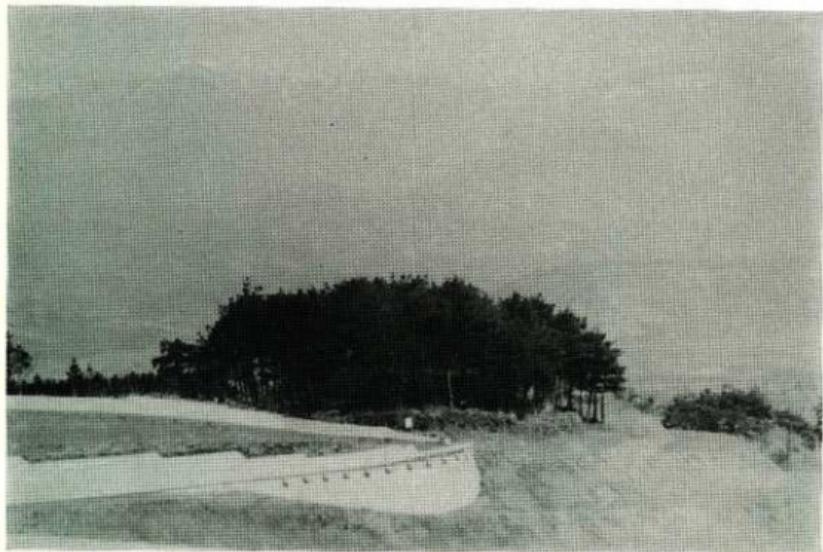


物見塚

山梨県中巨摩郡櫛形町所在
古式古墳発掘調査報告書



1983

櫛形町教育委員会
物見塚古墳環境整備調査委員会

序

この度、櫛形町では甲府盆地西部における、唯一の前方後円墳といわれている物見塚の発掘調査を文化財審議委員会の答申を得て、教育委員会を中心に物見塚環境整備委員会および調査団を編成して、昭和56年3月27日から4月19日までの24日間の日程で実施いたしました。その結果、今から約1,500年ほど前の古墳時代前期に属する古墳で、この地方では地域の歴史をひもとくたいへん貴重な古墳である事が確認されました。

本県では、いま、ふるさとづくり運動の推進が提唱されておりますが、櫛形町でも、子供からおとしよりまで、楽しく暮せる町づくり、アヤメの里をめざして、ふるさとづくりに取り組んでおります。今回の発掘調査は、その意味でも町民が地域を知り、地域を考え、地域の良さを次代に伝承していくとぐちとして、大きな意味を持つものと考えております。これらの観点から、今後、この古墳の保護、保存を図っていく所存であります。

最後に、今回の調査ならびに報告書作成にあたり、御指導、御協力下さった関係各位に深く謝意を表し、本報告書が今後、遺跡の調査、研究の布石になれば幸いと存じます。

昭和58年3月

櫛形町町長 小林喜男

例　　言

1. 本書は、山梨県中巨摩郡柳形町下市之瀬字上野に所在する物見塚古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、物見塚古墳環境整備調査委員会が組織した物見塚古墳発掘調査団が、昭和56年3月27日より4月19日まで行った。
3. 本書は松浦宥一郎が編集し、分担執筆とした。分担執筆者名は各項の文末に明記した。
4. 本書の作成にあたって、とくに山梨大学教授西宮克彦氏より出土玉類の石質に関する同定していただいた。また、元興寺文化財研究所による出土鉄器処理後の写真を使用した。記して謝意を表する次第である。

目　　次

序	柳形町町長 小林喜男
I はじめに	1
II 古墳の立地・環境	3
1. 古墳の立地	3
2. 周辺の遺跡	5
III 古墳の沿革	8
IV 古墳の現況	10
V 古墳の測量調査	11
VI 古墳の発掘調査	13
1. 調査の目的と方法	13
2. 調査の経過	15
3. 主体部の調査	20
4. 前方部の調査	22
5. 出土遺物	26
付 出土玉類の石質	29
VII 出土遺物の考察	30
VIII おわりに	33

I はじめに

物見塚古墳は、甲府盆地を一望のもとに見渡すことができる大変眺望の良い場所にあって、古くから近隣の人々に知られ、また、親しまれてきた。

墳丘の中心部はすでに発掘されて、銅鏡1面、管玉、丸玉等が出土したと伝えられており、比較的古式の古墳であることが推定された。また、円丘の東側にのびる前方部状の高まりが認められ、従来より前方後円墳であるか否かが問題とされてきた。こうした本古墳の種々の状況から、甲府盆地西部、特に釜無川西岸に位置する唯一の古式の前方後円墳の可能性が考えられてきたのである。

ところが、昭和54年頃より、県農地開発公社による古墳周囲一帯の農地改良と農道敷設のための造成工事が行われ、不用意にも古墳の前方部先端と思われる箇所の一部が削平されてしまった。

そこで、櫛形町教育委員会では、とりあえず古墳周囲の造成工事の中止を要請した。その後、町史跡として古墳の保存をはかるために、その環境整備資料を得ることを目的として、昭和55年1月に墳丘測量調査、翌56年3月末から4月にかけて発掘調査を実施したのである。

(松浦有一郎)



第1図 物見塚古墳遠景（南側丘陵上より）



第2図 物見塚古墳周辺航空写真

II 古墳の立地・環境

1. 古墳の立地

櫛形町は甲府盆地の南西部にあり、地形的には大まかに御勤使川・滝沢川の扇状地である東部の平地帯と櫛形山山麓である西部の山付地帯とより成っている。この櫛形山をはじめ標高2,000m前後の山々が南北に連なる巨摩山地の西側には早川の急谷を挟んで赤石山地(南アルプス)がひかえており、一方東側は急傾斜して高尾・城山など標高500~1,000mの山地へと続き、それから一段下がって市之瀬台地そして平地部へと至る。

市之瀬台地は、本町上宮地部落付近から甲西町湯沢部落西側へと南北に続く高台、即ち、田頭・平岡・上巣・中野部落から東側に広がる高台一帯である。標高400m前後で地表面はなだらかな起伏をもち、東縁は急傾斜して平地部へと続く高度差50~100mの断層崖をなしている。これは断層運動により台地先端が逆に上升して生じたもので、そのため六科丘・上野山・御殿山などのように台地先端に近い所が小高く、そこから山地側へ逆に漸次傾斜して平坦な鞍部がみられるという地形がつくられた。同様の断層地形は台地西方の山地にも見られ、地名も平と称する所が多くあり縄文時代の遺跡などもみられる。

台地上を流れる主な川は、北から深沢川・漆川・市之瀬川・堀野川そして台地南縁を流れる秋山川とあり、その他の小沢と共に台地を幾つもの尾根状の丘陵に分けている。この地方の川はふだん水量は少ないが、一旦大雨となると西方山地から下る流れは急激で大量の土砂を下流へと押し出すが、これらの川も台地下に小規模な扇状地を形成している。また、そのために水害を蒙ること数多く、滝沢川や市之瀬川などに見る天井川は水害との格闘の歴史を物語るものである。

一方、平地部は砂礫層が厚く堆積した扇状地であり、僅かに湧水をみる外は一般に地下水位は低くまた保水性も小さいことなどから干害を受けやすい土地柄もある。現在の耕地をみると平地部および台地東半部など本町では殆ど果樹・桑園などの畑地であり、僅かに山地と接する辺りおよび台地下付近に小規模な水田がみられる。ちなみに、水田地帯は本町より低位の若草町加賀美・甲西町江原辺りに始まり、両町の藤田・五明・南湖地区に本格的に展開する。

物見塚は下市之瀬部落の西、上野山丘陵の尾根先端部、標高約375mの所にあり、甲府盆地を一望のもとに見渡すことができる。古墳と丘陵直下平地部との高度差は約35m、最寄りの集落のある平地部との高度差は50~80mほどである。

上野山丘陵は市之瀬台地の中央部南寄りにあり、北を市之瀬川、南を堰野川に挟まれて東に延びた標高410m前後の平坦部の少ないヤセ尾根で、先端部は小高くなっているが、上野山と呼ばれている。丘陵縁辺は、いずれも急斜面となっているが、北側が殆どいっくに降るのに対して南側は途中に緩傾斜地を挟んで堰野川へと降っており、また東側は丘陵先端部で南北2つの小さな尾根に分かれて下降している。

物見塚はこの南側の尾根の中程に位置するが、その付近は緩やかな傾斜地となっており、この尾根を南から見ると、上野山に接した小山のような姿を呈していることから、この辺りは日向山とも呼ばれている。古墳付近一帯は、僅かな桑畠の外は山林となっているが、最近東側と南側の隣接地は造成工事によって山の地肌が露出してしまった。



第3図 物見塚古墳(●)周辺地形図(1:15,000)

2. 周辺の遺跡

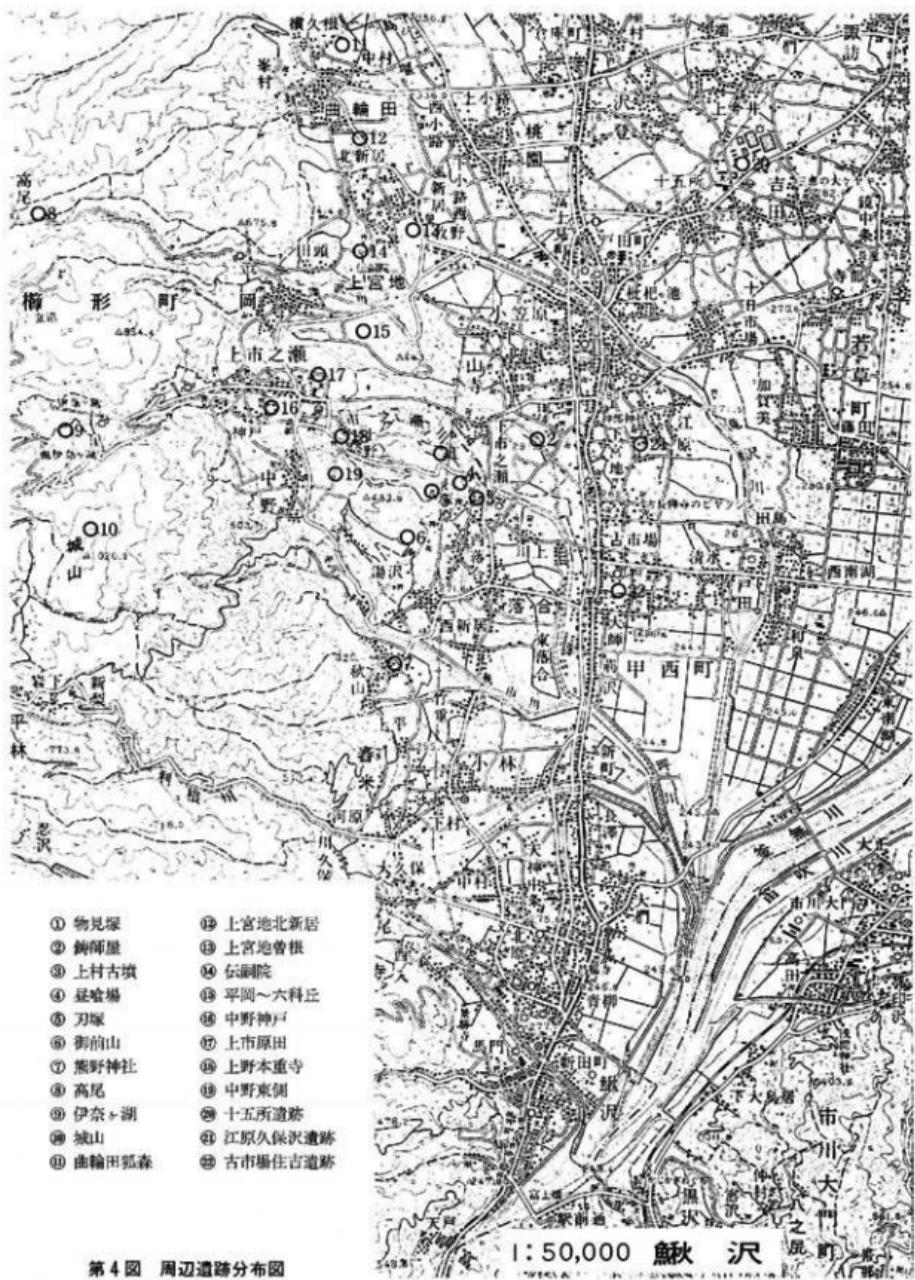
下市之瀬部落の東から甲西町下宮地御崎神社周辺にかけての鉄師屋と呼ばれる畠地一帯（第4図②）には、石を小山のように積み上げて造った積石塚と呼ばれる小規模の古墳が多くみられるが、本町の古墳についてはこの積石塚群が知られているにとどまる。かつて、その中の一つの円墳に横穴式石室が発見され、人骨の一部と共に直刀（？）・鉄鎌・須恵器・土師器などが出土している。このような古墳は物見塚よりも新しく古墳時代後期も後半の頃のものとされているが、その詳しい時期やどういう人々がこれを造ったのか、また、その時代的・社会的背景など論議の盛んなところであり、当地の積石塚群についても鉄師屋という地名とも絡んで大きな関心が持たれている。

この外甲西町地内に入ると、塚原の上村古墳（後期円墳）③、秋山の熊野神社⁽³⁾などがみられるが、特に塚原地内にはその名の示すように、かつては、多くの古墳があったようであり、畠耕作中に横穴式石室なども発見されている。また、上野山丘陵の南に対する塚原山山上には円墳と思われる刃塚⑤があつたが、古くに大部分が破壊されており詳細は不明のまま最近消滅した。

古墳の外に本町には縄文時代から中世に至るまでの遺跡が数多く知られているが、それらは山地から平地部にまで亘って分布している。山地では高尾⑧や伊奈ヶ湖付近⑩に縄文時代の遺跡が知られている。市之瀬台地上には全体に亘って多くの遺跡がみられる。なかでも、平岡部落の東に広がる平坦地から六科丘にかけての一帯⑪は、縄文時代から中世の遺跡であり、特に、平坦地部分からは多くの土器・石器が採集されており、縄文時代中期を主とした遺跡としてよく知られている。

六科丘開発計画に伴う発掘調査の予備調査（昭和57年11月）では、古墳時代前期前半五傾期の堅穴住居址數軒の存在が確認されたほか、中世の地下式土壙の存在する可能性も持たれており、今後の本調査が待たれるところである。

台地上のその外の主な遺跡としては、上宮地伝嗣院周辺（縄文・古墳時代）⑫、中野神戸（縄文・弥生時代）⑬、上市之瀬原田（弥生時代）⑭、上野本重寺付近（縄文時代・中世）⑮、上野山丘陵先端部の小平坦地（弥生～古墳時代）、中野部落東側（縄文・弥生時代）⑯、甲西町湯沢御前山（縄文～古墳時代）⑰などがある。台地下およびその付近には、曲輪山孤森（縄文・弥生時代）⑱、上宮地北新居周辺（縄文・弥生・平安時代）⑲、上宮地曾根（縄文時代・中世）⑳、下市之瀬鉄師屋（縄文～平安時代）



第4図 周辺遺跡分布図

②などが知られており、甲西町塚原地内に入ると屋喰場遺跡(縄文～古墳時代)④、上の東(弥生～古墳時代)などが知られている。

これらから東方の平地部となると知られているものは少なく、本町では僅かに豊小学校付近に古墳時代の十五所遺跡⑤をあげることができる。ついでさらに、低地では甲西町大井・五明地区に弥生時代から平安時代の遺跡がみられ、江原浅間神社周辺の久保沢遺跡(古墳時代前期後半)⑥、古市場若宮神社付近の住吉遺跡(弥生時代後期・平安時代)⑦などが良く知られている。

また、本町には甲斐源氏・武田氏に関連した城址や館跡などが幾つか知られている。中野の城山(標高1,020m)には秋山光朝が拠ったとされる中野城(兩鳴城)⑧がある。城山の山頂の一部には土壘・堀切が残され、また少し下って帶郭がみられるほか、城山の東南兩鳴山に続く尾根上にも土壘や堀切で構築した小郭がみられる。

次に、上野本重寺付近⑨には大井氏が拠ったという上野城(椿城)があったとされるが、現在ではその痕跡をみるとすることはできない。また、時折この付近の耕地の一部が陥没することがあり、古くからこれを城の抜け道とする説があったが、最近の発掘調査によりこれらは抜け道ではなく地下式土壙と呼ばれるものであることがわかった。これら城址の外、現在の小笠原小学校付近には加賀美遠光の二男小笠原長清の館があったと伝えられている。

(新津 茂)

註

- (1) 柳形町誌編纂委員会編『柳形町誌』 1966
甲西町誌編纂委員会編『甲西町誌』 1973
- (2) 『甲西町誌』
- (3) 註(2)に同じ。
- (4) 註(2)に同じ。
- (5) 「山梨県遺跡地名表」山梨県教育委員会 1979
- (6) 数野雅彦・他「柳形町平岡採集の土器について」丘陵1-3・4合併号 1977
- (7) 註(2)に同じ。
- (8) 住吉遺跡調査団編「住吉遺跡—弥生時代集落址の調査」甲西町教育委員会 1981
- (9) 湯本軍一・磯貝正義編『日本城郭大系』第八巻 1980。『柳形町誌』、『甲西町誌』
- (10) 『日本城郭大系』第八巻
- (11) 註(9)に同じ。
- (12) 昭和54年に柳形町教育委員会によって行われた。未報告。

III 古墳の沿革

物見塚の名称は、『甲斐国志』古跡部上野城塚の項に、胄塚、兜塚等と共に登場する。この「物見塚」が現存する物見塚古墳を指すものかどうかは検討を要するが、少なくとも、上野地区の一隅に、「物見塚」と称される古跡があったことは事実であろう。更に、『甲斐国志』には、物見塚の説明として「方廿間間ラスニ甃石アリ」と記載されていることから、「物見塚」は、甃石すなわち石垣、換言すれば、甃石を伴った古墳という解釈ができる。

昭和3年、中巨摩郡連合教育会により刊行された『中巨摩郡志』第一編通史および第十五編史跡名勝誌に、「野々瀬村字上野山に有る錢塚」という古墳が登場する。これは「山上古墳の一にして、完全なる前方後円墳なり。且甃石塚にして松樹間に甃石の痕跡今猶歷然たり。石櫛は露出せざるを以て堅穴、横穴の何れなるかは不明なるも、周囲の環境より見て堅穴式なるが如し。塚は東西に延長し、山稜により眺望頗る絶佳にして、遠く甲府盆地を俯瞰し得べし」と説明される古墳であり、同時に、規模の記入された見取図が掲載されている(第5図)。

この錢塚の所在地および展望良好な山上に位置する、石で甃かれた前方後円墳という記述は、正に現存する物見塚古墳の性格にあてはまる。さらに、錢塚の規模は、全長51m、前方部20m、後円部31m、後円部の高さ4.2m、前方部の高さ1.5mと計測されている。この数値は、昭和55年に実施された測量調査による物見塚古墳の規模——全長46m、後円部径30m、高さ4.2m、前方部長16m、高さ1.5m——と比較して、前方部先端が削平されたことによる全長計測値の違い以外は、ほとんど一致する。従って、錢塚と現在の物見塚古墳とは、同一の古墳とすることができる。

その後、昭和15年に刊行された県立巨摩高等女学校編『西郡地方誌』には、野々瀬村上野の東端に「前方後円塚」である「物見塚」のあることが載せられ、地図上にもその所在地が記入されている。この位置は、現存の物見塚古墳の位置と共通するものである。さらに、乱掘により掘り出されたとする鏡、管玉、丸玉などの写真が掲載されている。

この乱掘については、昭和11年、地下9尺まで乱掘を受け、堅穴式の内部に木棺があり、副葬品として仿製鏡、管玉、剣が発見されたという経緯が、『甲西町誌』(昭和48年刊行)に載せられている。これらの遺物の所在は、今なお不明である。

以上から『中巨摩郡志』記載の錢塚、『西郡地方誌』記載の物見塚は、どちらも現存する物見塚古墳であることが確認できる。さらに、この名称は、『甲斐国志』にも登場しており、「観石」＝観石とすると、それは現存の物見塚古墳とすることができるよう。

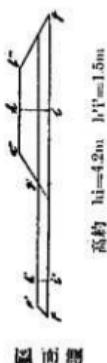
さらに、それは観石と堅穴式の内部構造をもち、剣、鏡、玉の組み合せを有する古い様相の前方後円墳とすることが可能である。

ところで、「物見塚」という名称は、『甲斐国志』上野城塚の項に、「瓦焼場」「狼烟場」等の城に関する施設と共に記載されていることから、物見台に利用されていたという伝承に由来するものであろう。つまり、物見台に使用されたという真偽はともかく、展望良好な山上に位置すること、截頭円錐形という頂部が平墳であることなどから、戦国時代以降に起り伝えられた名称であろう。

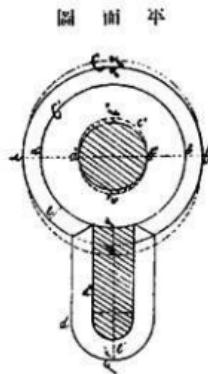
これに対して、「錢塚」の由来は不明であるが、『甲斐国志』古跡部石室の項に「西野村ニ三所、一ハ錢神ト名ク」という記載があり、錢と塚に関する習俗、伝承があったのかもしれない。

さて、この「物見塚」「錢塚」について、『中巨摩郡志』では錢塚とし、『甲斐国志』にある物見塚の記事を掲載しながらも、錢塚と物見塚との対比は全く行っておらず、執筆者は両者をそれぞれ別の

松樹其他雑木寄生して正確なる測量と實撮影は不可能なり。大体の測量なる大きさ形状に於て大同小異なり、差したる誤認なきことを信ずる。
駕籠も石を以て積み上げた状態は繪図知し得べし。



圖面側



圖面平

直径	$ab=31m$ 強	$a'b'=23m$ 弱
周長	$a''b''=10.9m$ 強	短徑 $a'''b'''=13m$ 強長徑
c—底の周辺	$c=98m$ 強	$c^1=72.3m$ 強
$c^1=40m$	$c, c^1=3.6m$	
全長	$Fg=51m$ 強	
	$F'g=20m$	$F''g=31m$ 強

第5図 物見塚古墳見取図（中巨摩郡志より）

塚としてとらえていたようである。あるいは、『中巨摩郡志』の編纂された昭和初期には、「銭塚」名が一般に用いられていたのかもしれない。

それが、『西郡地方誌』では、『中巨摩郡志』を十分に参考としながらも、「銭塚」名は全く登場せず、鏡や玉類が出土した「物見塚」として、地図上に位置までも記入されている。このことから、昭和11年の乱掘時以降、「物見塚」に定着し、『西郡地方誌』を経て現在に至っていると解釈できよう。

なお、物見塚とともに上野城付近にある古跡として、『甲斐国志』に記述のある青塚、兜塚については、詳細全く不明である。物見塚古墳の西方300mの高台に上ノ東古墳があり、また、南側対岸の台地上に、刃塚古墳（甲西町誌）があったとされるが、今は湮滅し、その所在すら確認が困難になってしまった。これらの丘陵上から一段下った地域が塚原地区であり、その名の示すとおり、嘗ては、古墳が多く残されていたようである。『甲斐国志』には石室だけでも15ヶ所あると記されているが、今は僅かに1,2基が確認できるにすぎない。なお、『甲西町誌』によると、塚原の北端に鎧塚という古墳があった山である。以上の、今は無き相当数の古墳の中に、「青塚」や「兜塚」も含まれていたにちがいなかろう。

いずれにしても、櫛形町上野地区から甲西町塚原地区にかけては、多くの古墳が築かれたが、それらの大半はすでに湮滅し、存在すら記録に残っていない。かような状況の中で、今なお松柏の林の内に端整な姿の物見塚古墳を認むるは、幸いとせねばならず、今後の保存、整備の必要性を考えざるを得ないのである。

(新津 健)

引用・参考文献

『甲斐国志』

山梨県中巨摩郡連合教育会編『中巨摩郡志』 1928

山梨県立巨摩高等女学校編『西郡地方誌』 1940

『甲西町誌』 1973

IV 古墳の現況

現在、古墳の範囲は松、杉、雜木の山林として残され、それらの間に高さ約4mのこんもりとした円い塚となっている。この円丘は全体をやや大振りの凸礫（河原石）で葺かれているが、墳麓周囲は盛土ごと削り採られ、急な崖状をなしている。

墳丘標の部分から約5mの間隔をおいて、円丘に沿って石垣が築かれている。この石垣は、おそらく墳丘の葺石を転用して構築したものと考えられる。

高い円丘の東側には尾根の下方にのびる方向に、やはり石垣で囲まれた矩形の高まりが見られる。これは円丘に比して一段と低くなっている。一見すると前方後圓墳の前方部のように見える。しかしながら、単なる尾根の自然の高まりの削囲を削って、石垣を積み上げたことによって、前方部のように見えているにすぎないという可能性もある。

このように、現状では本来の古墳の形態を判別できなくなるほど著しい墳丘の変形がみとめられるのである。これは地権者の話によると、古墳の場所が戦時中畠地として利用されたためであるといふ。

また、前方部か否かと考えられる高まりの東側先端部は、最近の造成工事によって、その一部を削平されてしまい、もし前方後圓墳であった場合でも、その全長、規模について正確には知り得なくなってしまった。

(松浦宥一郎)

V 古墳の測量調査

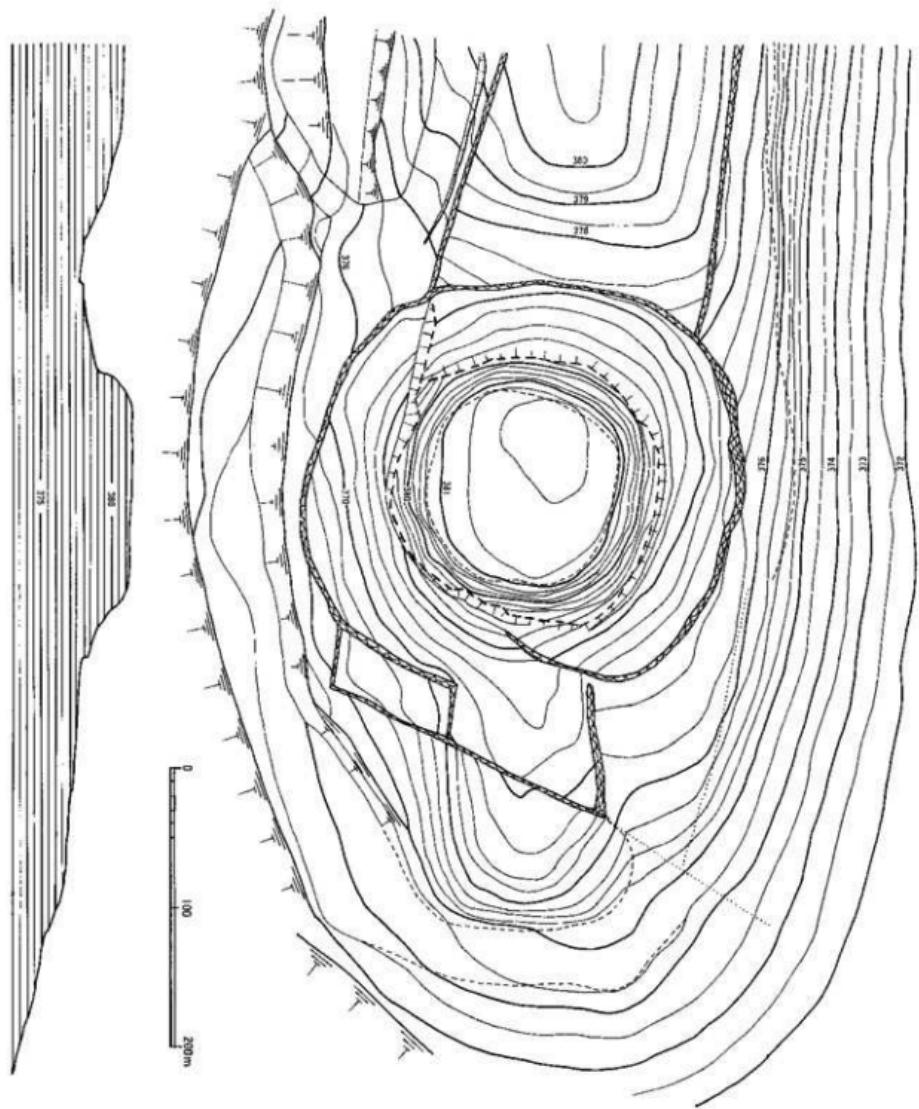
櫛形町教育委員会では、物見塚古墳の町指定、保存計画の第1段階として、まず古墳の現状での正確な資料を得るために、墳丘およびその周囲の測量調査を行うこととし、松浦宥一郎が担当者として、昭和55年1月5日より同11日までの1週間にわたって実施した。

墳丘測量調査の目的は、墳丘の現状を等高線として精確に図化し、図上で本来の規模と墳形を推定復元することにある。本古墳の場合は、前方後圓墳であるか単なる円墳であるかを判定することを目的とした。

今回は平板測量で、直接現地にて図化するという方法をとった。なるべく誤差を少なくするため、トラバース測量によって測量する範囲の枠組みを設けた。作図の縮尺は1:100とし、等高線は25cm間隔とした。

この測量調査の結果、次のことが判明した。

- (イ) 全長48m前後の前方後圓墳の可能性が高い。これは前方部と思われる円丘東側の高まりが自然丘の等高線の流れとくい違うためである。
- (ロ) N-80°-Eに主軸をとり、ほぼ東西に向く前方後圓墳の可能性がある。



第6図 填丘実測図 (1:400)

- (ハ) 規模は現存している全長46m, 後円部径約30m, 前方部現存長16m, 同幅約14m, 後円部の高さ4.2m, 前方部の高さ1.5mである。
- (二) これらの形態, 規模より前方部の極端に低い, やや帆立貝式に近い中型の前方後円墳の可能性がある。
- (三) 後円部と推定される円丘の頂部は, 直径約13mの広い平坦面をなし, 截頭円錐形をとる。
- (四) 外部施設として, 莢石が墳丘全面に配されたものと推定されるが, 周溝, 墓輪は認められない。
- (五) 以上の諸点と乱掘による内部構造, 出土品を考えあわせると, 本墳は前期様式の古墳と考えられる。しかし, これらの結果はあくまでも表面上の観察であって, より明らかにするためには発掘調査が必要とされる。

(松浦宥一郎)

VI 古墳の発掘調査

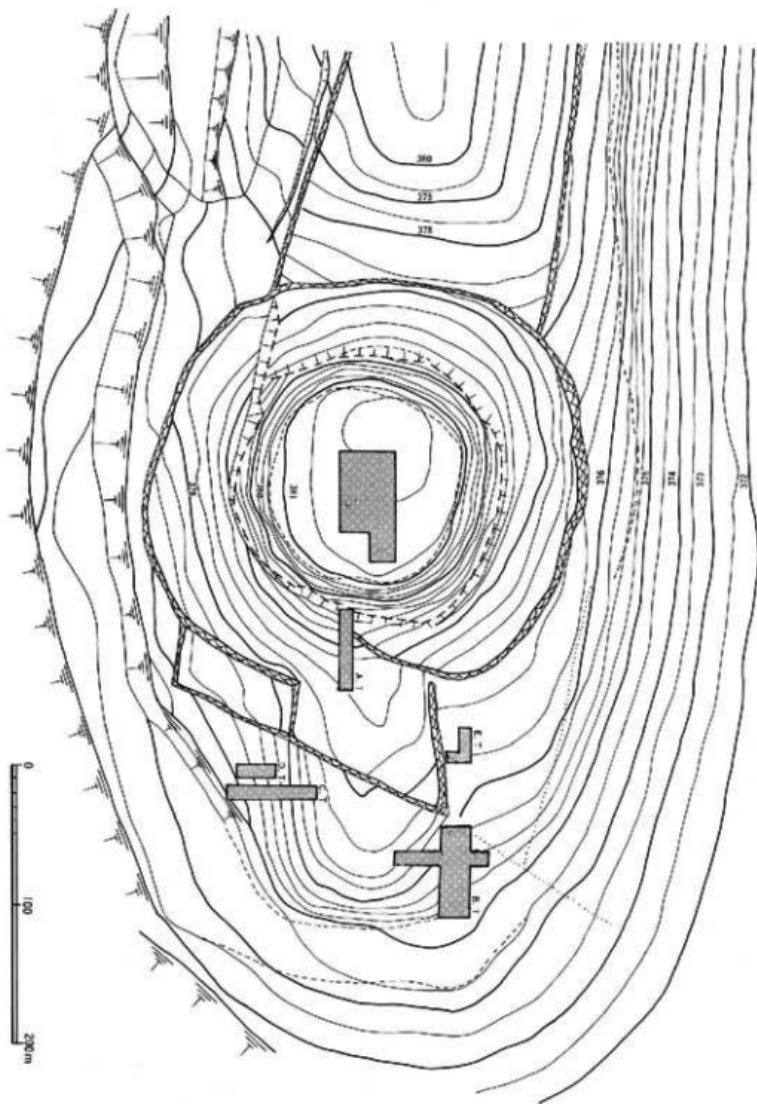
1. 調査の目的と方法

今回の発掘調査は古墳の保存をはかるべく環境整備のために, まず最少限の必要な資料を得ることが目的である。

そのために, 古墳の形態, 規模, つまり前方後円墳であるのか否か, 古墳の範囲はどこまでか, ということを調査の第1の主眼においていた。また, 古墳の時期, 性格を知るために, 内部主体の構造を確認することとした。

前者については, とくに不明確な前方部と想定される高まりの部分の調査に重点をおき, 後円部との境界部分に古墳の中軸線方向にトレンチを入れ, さらにそれと直交する南北方向にトレンチを入れて, 前方部であるか否かを確認することとした。また, 後者については, 後円部墳頂部に大きなグリッドを設け, 主体部が発見された時点で, その構造の種類を確認し, 主体部そのものの調査は別の機会にゆずることとした。

(松浦宥一郎)



第7図 調査免振区図 (1:400)



2. 調査の経過

前述のように、古墳の形態、規模、内部埋葬施設等を知ることを発掘調査の主眼として、3月27日から4月19日まで延べ22日間にわたって実施した。

以下その経過の概略を述べることにする。

3月27日（金） 晴

古墳の墳頂にて町長、町議会議員、環境整備調査委員、調査団、郷土研究会など各関係者が集り鍬入れ式を行った。式後ただちに、竪穴系の埋葬施設を想定し、円丘部墳頂に1m×1mのグリッド6個を設定し調査を開始した。6個にA・B・C・D・E・Fのグリッド名を付し、各トレンチおのおの約20cmほど掘り下げた。

3月28日（土） くもり

墳頂部の土層は表土より20~30cmまでは松の根が入り、腐植されていたが、40~50cmほど掘り進むと、赤褐色を主とする凝灰岩、砂岩などが含まれた粘性の土質に変わった。今日のところ明確ではないが、墓壙と思われるプランが確認された。幅1.5m、長さについては不明である。

円丘上の主体部の調査と併行し、円丘の東側に前方部状の高まり面に、前方後円墳か、円墳なのかをさぐるために、幅1m、長さ6mのAトレンチを設定した。

3月29日（日） 晴

主体部の調査は、より慎重に精査した結果、粘土櫛か木棺直葬であるかやや不鮮明であるが、幅1.8m×長さ2.6mのプランが想定された。しかし、プランは各グリッドに搅乱が入りこみ、より明確ではない。搅乱部分は昭和11年頃に受けた盜掘痕であろうか。Fグリッド内の東壁に沿って人頭大の河原石が東西に2個並んで出土



第8図 鍬入れ式



第9図 墳頂部の調査

した。竪穴式石室の埋葬施設も考えられ、Fグリッドの東に2×2mのGグリッドを設定し掘り下がったが、何の遺構も認められなかった。

Aトレンチ完掘、表土下20cmで地山につきあたる。土層の観察によると客土はまったく認められず、円墳の可能性もある。あるいは前方部状の高まりは、地山を削り出したのか本トレンチではどちらともいえない。

3月30日（月）くもり

主体部プラン確認面の写真撮影。セクションベルト、図取り、セクションベルト除去。搅乱は盜掘壙であり、かなり下部まで掘られていくようであり、主体部の調査はこの盜掘壙を手がかりに、さらに掘り下げる。今までのところ出土遺物なし。

前方部状北傾斜面に主軸に直交する幅1m、長さ7mのBトレンチを設定し、調査を行った。

3月31日（火）くもりのち雨

主体部平面プラン精査、清掃後写真撮影、AM. 10:00頃から雨が降り出し、写真撮影のみにて、すべての作業を中止し宿舎に引き上げる。

教育長・教育次長・事務局等の調査委員会一行来墳。



第10図　主体部の検出作業

4月1日（水）くもりのち雨

主体部平面プランの平板実測作業。平面プラン上に、新たに十字に幅40cmのセクションベルトを設け、I～IV区名をつけ土層を観察しながら遺構を慎重に掘り下げる。時折雨が強く降りしきる中、プラン確認面から約10cmの所（I区）から緑色凝灰岩製管玉2個が発見された。またI区とIV区を区画するベルト中に刀片が1片認められた。しかし、これらの土層の状態から判断して、盃掘による搅乱部土層中のものである。これらのことから考えると、遺構は当初考えていたより相当搅乱をうけているようだ。

雨も降りやまず午後は作業を中止し、宿舎に帰り、今後の調査方法について調査団会議を開く。

4月2日（木）雨のち晴

昨日来からの大雨で、午前中は作業不可能。

数日来降りつづいた雨は午後には上り作業再開する。墓壙内は約10cmほど冠水。ます排水作業から手をつけ、遺構上面のねば土を排土し終日天日にかわかす。

本日の墓壙内の調査は打ち切り、Bトレーニングの作業に全員でとりかかる。裾部にあたる位置から20cm大の円錐群が高まりの傾斜に沿って発見された。葺石である。あきらかに前方後円墳である。

4月3日（金）快晴

本日は数日来降り続いた雨が上り、快晴。紫外線も強く5月頃の天候を思わせる。I・IV区の墓壙内を重点に掘り下げる。また、I・II区ベルトにそって、サブトレーニングを入れ、墓壙の立ち上り確認につとめる。しかし、搅乱がひどくつかみきれないので、遺物を取り上げる。

五味補助員学業のため、本日をもって帰京。

4月4日（土）くもりのち雨

墓壇の掘り下げと墓壇の立上り確認作業。墓壇内土砂のふるいかけ作業を本日より行う。土師器片1片発見。午後雨のため作業中止。

4月5日（日）くもりのち雨

墓壇内冠水。主体部の作業をあきらめBトレンチの調査を行う。Bトレンチを拡張し、葺石のひろがり調査を行ったところ、葺石は東側先端部までのびていることが確認できた。これにより、前方部であることがほぼ確実となった。午後雨のため作業中止。

4月6日（月）くもりのち晴

主体部調査は冠水のため、作業中止。Bトレンチ反対側の南斜面に、幅1m、長さ6.5mのC、長さ3.5mのDトレンチを設定し葺石の有無を確かめた。大部分は除去されてはいたが数個円礫群が残り葺石であることがわかった。

本日より高橋調査員参加。

4月7日（火）晴

Bトレンチ内の葺石洗い出し作業。Bトレンチ、Cトレンチ土層断面図の作成作業。Bトレンチの土層は旧表土上に山石碎片入りの粘質赤褐色土を築きかためて盛土していることがわかつた。

4月8日（水）晴のちくもり

ようやく墓壇内もかわき3日ぶりに主体部の発掘にとりかかる。主にⅡ区を掘り下げる。併行し発掘区全体図作成。

Bトレンチ葺石検出状態写真撮影。葺石列平面図取りを始める。Cトレンチ土層断面図取り。町長一行来墳。

4月9日（木）くもり

墓壇内土層断面図取り。Aトレンチ写真撮影及び土層断面図取り。Bトレンチ葺石平面図、断面図取り。Cトレンチ埋もどし。ふるいかけによって刀子片1口発見。

4月10日（金）雨



第11図 前方部の調査

終日雨。午後雨の中Aトレンチ埋めもどし、それにしても今年は雨が多い。

4月11日（土） 晴

墓壙掘り方と粘土範囲の確認作業。粘土範囲の図取り。覆った粘土の取りのぞき、部分的に粘土床検出。

4月12日（日） 晴のちくもり

墓壙の精査、清掃、写真撮影。ふるいかけにより管玉1個、白玉1個検出。

4月13日（月） くもりのち雨

粘土床と掘り方実測。エレベーション図作成(縦1本・横2本)。主体部発掘区全体図実測。粘土床にサブトレンチを入れ、プラン確認面から約50cm掘り下げた位置から折れた2本の剣が発見された。剣の出土状況から盜掘壙らしい。

Bトレンチ土層断面追加図取り。

4月14日（火） 晴

遺物出土状態写真撮影、実測作業。遺物取り上げ。

Bトレンチ葺石をビニールシートで覆い埋めもどし。

PM. 2:00 から中央公民館にて発掘調査報告会(松浦団長報告)。夕方調査団慰労会。

4月15日（水） 晴のちくもり

遺物出土位置はやはり盜掘壙。この穴はさらに深いところまで達していると考えられ、攪乱土中に副葬品も混入してるとも考えられ、さらに掘り下げた。盜掘壙はプラン確認面から深さ2.3mの地山まで達していた。遺物は認められなかった。

4月16日（木） 雨

終日雨のため作業中止。



第12図 前方部北側葺石の検出作業

事務局と発掘日程について協議、2日間の延長が認められる。

4月17日（金） 晴

盗掘墳の土層観察によると、表土下約40cmの深さに認められた粘土は粘土層の一部とみられるが、他は2m以上の搅乱を受け、主体部の構造を確認しえなかった。

朝日、サンケイ新聞取材。

4月18日（土） 晴

埋もどし。

（森山久男）



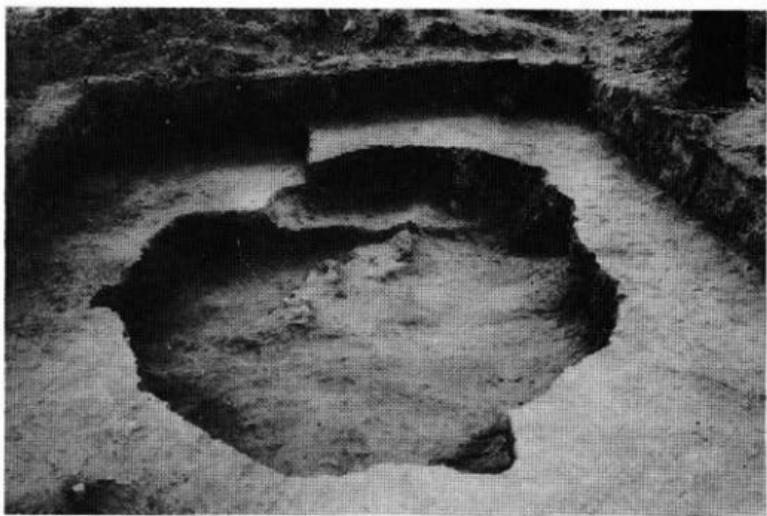
第13図 墳頂部発掘区全景

3. 主体部の調査

後円部の頂部に、主軸線に沿った東西6m、南北4mの長方形の発掘区を設け、それをさらに、南北2個、東西3個、計5個の2×2mのグリッドを単位として、調査を行った。

各グリッドを地表より約30cm掘り下げると、粘質赤褐色土を築き固めた盛土面に5m×2.6mの楕円形のプランが認められた。このプランの覆土は、赤褐色粘質土ブロックを多く含んだ土であり、土層を観察しながら掘り下げると、約30cmで白色粘土質の面が認められた。範囲を記録した後、切断したところ、白色粘質土は、ブロック状に浮いており、その下から鉄剣2本が縦位の状態で発見されるに至り、この落ち込みが乱掘墳であることが判明した。時間的に完掘することは不可能なためサブトレレンチを入れて、深さの確認をしたところ、地表面より2.5mにも達していた。この乱掘墳の覆土は、すべてふるいにかけたところ、白玉、刀子の破片を数点検出した。

この乱掘墳は、後円部の中心に位置しているため、主体部の崩壊は著しいが、僅かに黒色の落ち込みを検出した。掘り下げると、立上りが20cmでゆるやかに立上り、中から刀子の破片を発見した。この落ち込みを本古墳の主体部の残存部とする可能性が強く、約幅2.2m、長さ3.5mの規模の墓墳が推定され、白色粘土ブロック



第14図 捜査坑全景および粘土出土状態



第15図 主体部の粘土散布状態

を用いた粘土櫛および粘土床の存在が考えられる。

また、後円部東側に 20 cm 前後の河原石が 2 個並んで検出されたが、性格は不明である。

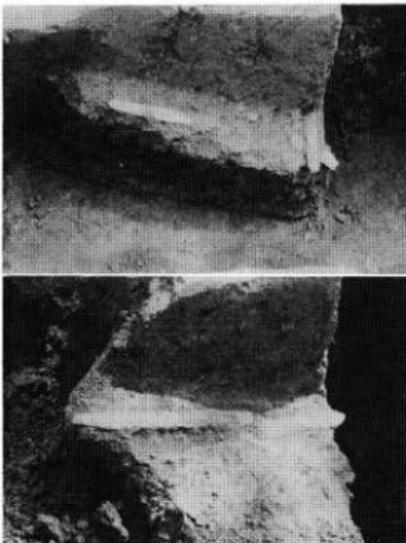
(渡辺健二)

4. 前方部の調査

A トレンチ

円丘の東に設けた幅 1 m、長さ 6 m の A トレンチは、円丘東側に前方部状の高まりが認められるが、これが前方部であるのかないのかを探ることをねらいとしたものである。すなわち、前方後円墳であるのか、單なる円墳であるのかを探るものである。

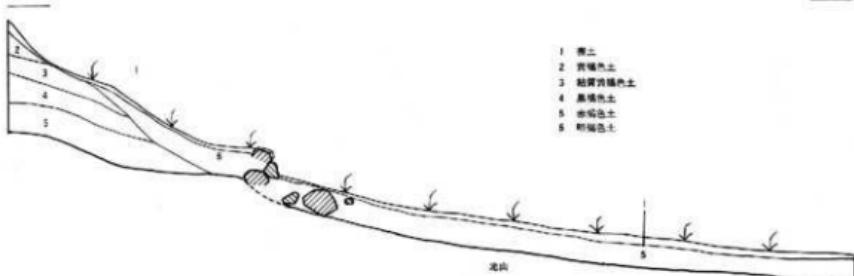
調査の結果、円丘部は第 1 層 表土、第 2 層、黄褐色土、第 3 層 赤褐色土、第 4 層 黒褐色土、小角礫混りの地山層からなり、あきらかに客土をしている姿が認められた。トレンチの円丘状部から約 2 m 東によった前方部状の高まりの部分は表土下、地山層であり客土はまったく認められなかった。また、円丘と前方部状の高まりを区画するように入頭大の円礫が帶状にとりまいていたが、表土中にあり、後世に畠として利用していた時に寄せたものと考えてよく、古墳築造時の姿ではない。



第16図 遺物出土状態



第17図 A トレンチ



第18図 A トレンチ土層断面図 (1/40)

以上の結果、前方後円墳なのか、円墳なのか本トレンチの様相では、明らかにしえなかつた。

(森田久男)

B トレンチ

前方部状の高まり部分北側に、その主軸線と直交する南北方向に幅1m、長さ7mのトレンチを設定した。地表より40cm掘り下げたところ、裾部に相当する位置に20cm前後の大きさの河原石が傾斜に沿って東西方向に並んで発見された。この石列は墳丘の土砂流失を防ぐ為などに設けられた葺石である可能性が高いので、さらに、トレンチの東・西側を拡張した結果、幅1.5m、長さ4mの規模で東側先端部の方まで続くことが判明した。

また、トレンチ西壁を観察すると、地表下50cmに黒色土層の旧表土があり、石列を境に南側にはその上に幅20cmで山石碎片入りの粘質赤褐色土を築き固めた盛土層が形成されていた。遺物は出土しなかつた。

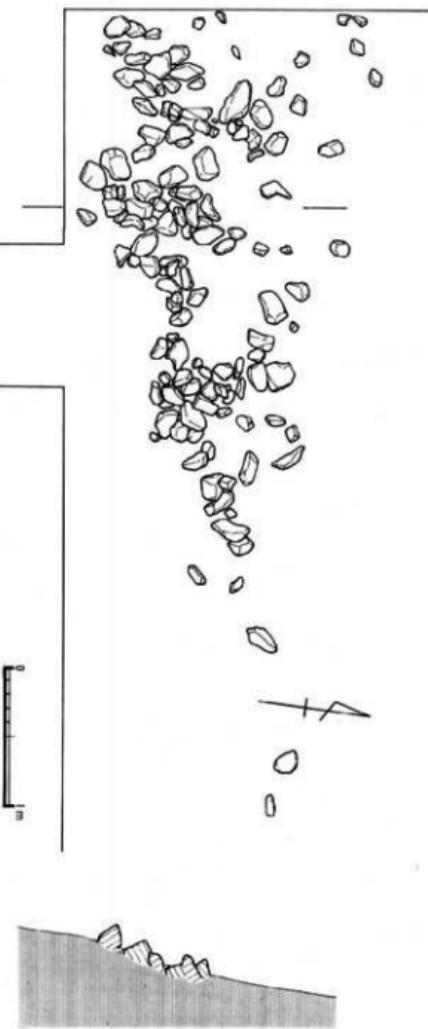
(山下孝司)

C, D トレンチ

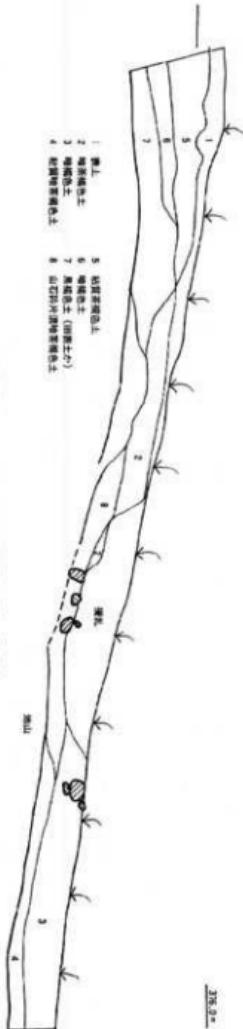
Bトレンチの反対側の南側斜面に、主軸線と直交する南地方に幅1m、長さ6.5mのCトレンチ、その西に幅1m、長さ3.5mのDトレンチを設定した。Cトレンチでは表土下30~40cmで地山層にあたり、20cm大の円礫が五個確認された。Dトレンチにおいても同様である。円礫は大部分が除去されていたが、Bトレンチに認められた葺石のたぐいと考えられる。

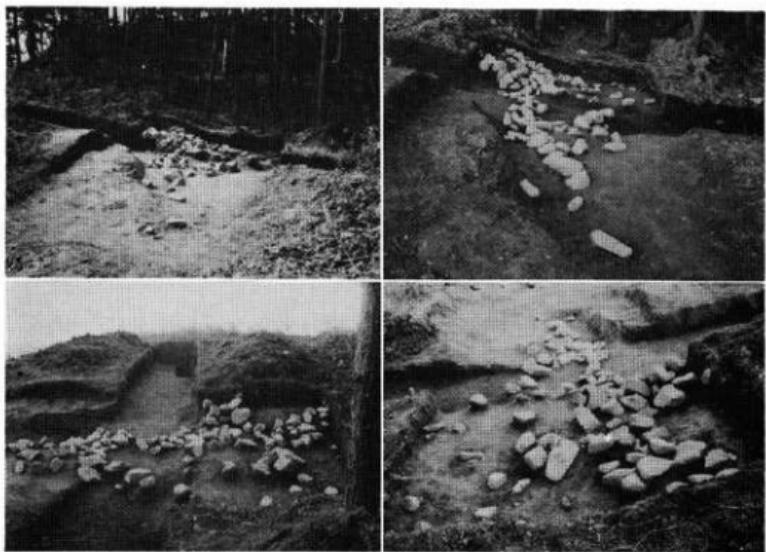
(高橋勝保)

第19図 前方部北側素石実測図 (1/40)

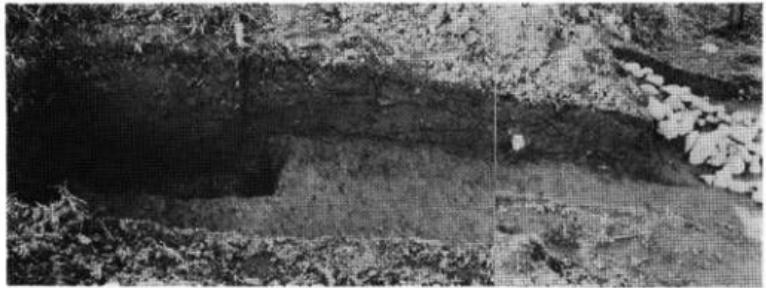


第20図
Bトレントレンチ土層断面図 (1/40)

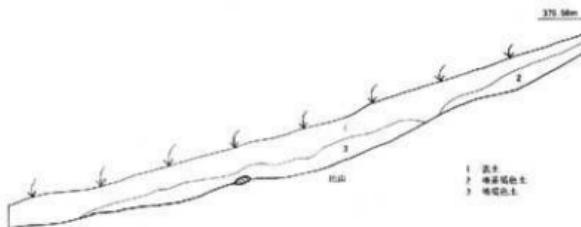




第21図 前方部北側葺石



第22図 B トレンチ土層断面



第23図 C トレンチ土層断面図 (1/50)

5. 出土遺物

調査の結果、本古墳からは剣、直刀、鉄釘、管玉などが出土したが、これらについて概略を述べてみたい。

剣（第24図1～3、第27図）

完全な形を窺えるものではなく、すべてが最大32.3cm、最小14.1cmの大きさに折れていた。これら破片の刃幅とかさねとの計測値を検討したところ、少なくとも3口の存在が考えられた。

1は鋒先が残るもので現存長39.5cm、最大刃幅3.6cm、最大かさね7mm以上を測る。

2は茎部の残るもので現存長32.3cmを測る。関は、片方が直角に切込まれているのに対し、他方はやや不鮮明で撫角状を呈している。茎部には関より4.5cm付近に目釘孔が認められる。関部幅は2.95cmであるが、最大刃幅は関部から7cmあたりにあり3.1cm、また同所のかさねは6.5mmを測る。

3は鋒先、茎部とも不明のものであるが、現存長34.2cm、最大刃幅3.15cm、最大かさね7.5mmを測る。

これら3口の剣は、いずれも茎部から鋒先に向って刃幅を漸次縮小してゆき、断面菱形を呈し鶴の走るものである。

直刀（第24図4、第27図）

刃幅が最大2.3cmと極めて細身のもので、あるいは刀子とも考えられるが、刃の造りが直刀のそれに近い形態と考えられるので、直刀として扱っておきたい。平棟平造で現存長9.5cm、棟厚5mmを測る。関は、刃関側が一部欠損しているものの撫角形態をとるものである。棟側には、直角に近い状態で深さ1mmほどの浅い切込みが取られ、棟関とも考えられるが判然としない。身の一部に鞘の残存かと考えられる木質が、また茎部にも木質ではないかと考えられる付着物が認められる。

鉄釘（第24図5）

断面長方形で、鈎状頭部の形態のものである。他の鉄製品に比べて残存状態が十分良好で、鏽による膨らみも見られず、先端部の欠損を除きほとんど製作時と同寸と考えられる。しかし、残存状態に他と隔りが見られ、剣などと一緒に埋められたものか否か判断しがたい。現存長12.5cmを測る。

管玉（第25図1~4、第27図）

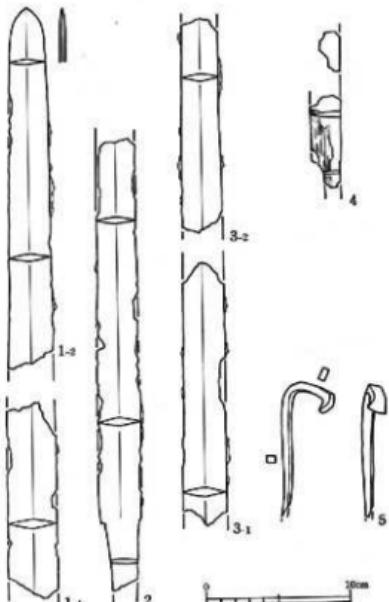
調査によって5個出土したが、個体としてとらえられたのは4個であった。なお、過去において8個の出土が確認されており、都合12個となる。

材質はいずれも緑色凝灰岩製の軟質のものである。風化が進み、表面が荒れている。長さは完全なものがなく不明であるが、現存長で最も長いものは2.6cmを測る。直径はすべて6mmをわずかに前後する間にあり、断面はほぼ正円形を呈する。孔の穿孔方法は両側より行うのを原則としている。しかし、3のように両側からの穿孔でありながら、片側からの穿孔が他端に達しているものも存在する。また、穿孔方向が悪く、途中で管玉の本体を突破ったものや、両方向からの穿孔の合致

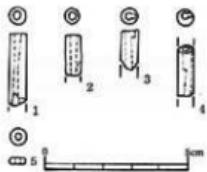
点においての誤差の大きいものが見られる。孔径は2~2.5mmを測る。

小玉（第25図5）

緑色凝灰岩製である。側面は弧状を呈し平滑に仕上げられている。また、端面は大きな平坦面を呈する。



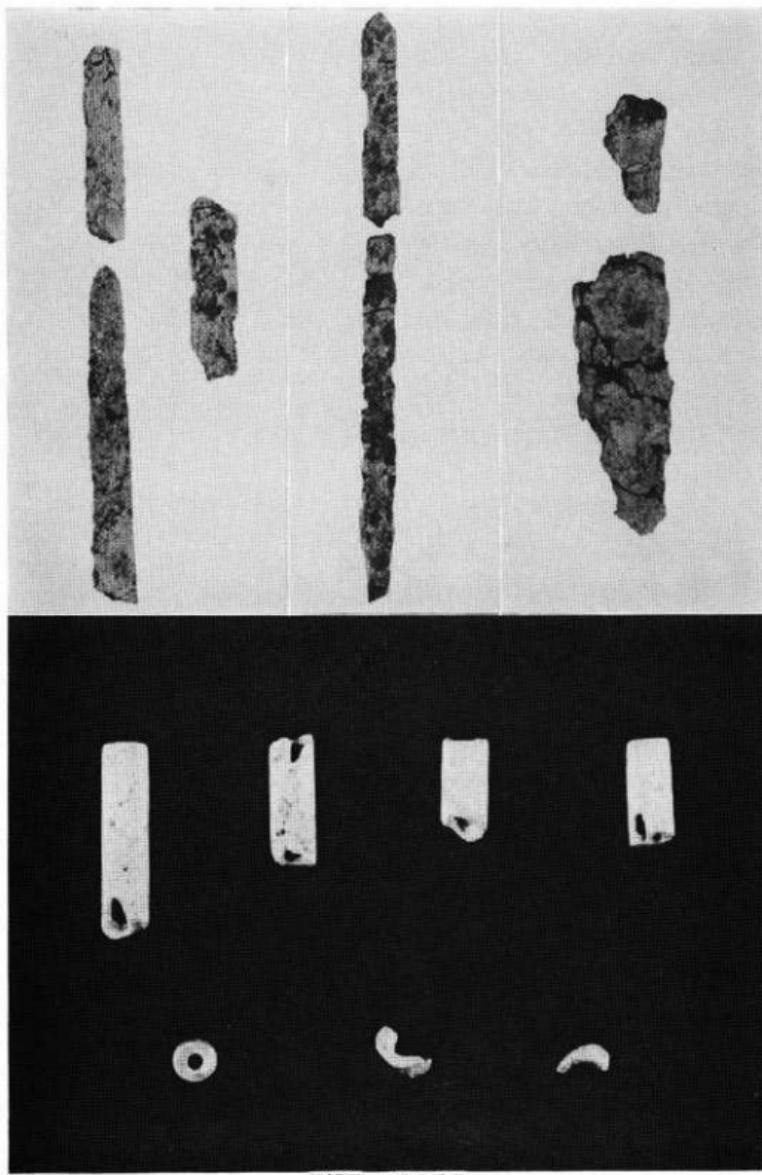
第24図 出土鉄器実測図



第25図 玉類実測図



第26図 主体部内の土をふるう



第27圖 出土遺物

付 出土玉類の石質

——物見塚古墳出土の管玉および白玉の石質同定結果——

山梨大学教授 理博 西宮克彦

(1) 管玉 4個

- 石質 緑色凝灰岩
- 産地推定 櫛形山東麓
- 石の特徴

〔形成過程〕

安山岩質の火山灰が中新世中期頃（約2,500万年前）の海底火山活動期（グリーンタフ変動期）に堆積して固結し、その後の地殻変動によって陸化上昇した。

〔加工度〕

溶岩でないので加工は比較的容易であったと推定できる。

〔美的度〕

現在は風化して表面に Fe_2O_3 酸化鉄などができるので、然程美しいことはないが製造した時は緑色が美しかったのではないかろうか。

(2) 白玉 1個

- 石質 緑色凝灰岩
- 産地推定 櫛形山東麓
- 石の特徴

〔形成過程〕

グリーンタフ変動期に堆積したものであるが、安山岩質の火山灰よりは、流紋岩質の火山灰に近い。

〔加工度、美的度〕

管玉4点に比し、多少加工に時間を要したものと思われる。これは、硬度が多少高いためである。美的度もまさり、一見すると、ヒスイに似ていたであろう。

なお、以上は鏡下での観察であるため、更に詳細に研究するためには、X線等による観察が必要であることを付記しておきたい。

VII 出土遺物の考察

珠文鏡は『西都地方誌』によれば、直径 6.6 cm ほどの大きさのものであった。内区に一列に珠文を巡らし、外区に櫛齒文、鋸齒文の順にそれぞれ配するものである。

県内出土の珠文鏡としては、これまでに甲府市・桜井古墳群逍遙院支群第1号墳(B号墳)、同伊勢町遺跡などから発見されている。桜井古墳群例は、瑪瑙製勾玉を作出したもので、内区に一列の珠文を巡らし、外区に鋸齒文のみを配する型式のものである。桜井古墳群は、内部主体に竪穴式石室と横穴式石室とが混在する積石塚群である。副葬品の明確なものが少なく、特に竪穴式石室の年代推定の資料は全くなく不安な面もあるが、一応7世紀代を中心とする古墳群で、古く遡っても6世紀代ではないかと推定されている。一方、伊勢町遺跡例は内区に一列の珠文を巡らし、外区に櫛齒文のみを配する型式のものである。伊勢町遺跡は祭祀遺跡で、小型壺の中に滑石製勾玉と一緒に納められて出土した。小型壺も、また、周囲から出土した土師器類も和泉式の時期に比定されるもので、およそ5世紀後半代と推定されている。

桜井古墳群例や伊勢町遺跡例は、いずれも外区の文様構成において違いが見られるほか、伴出遺物のうちの特に玉類の材質の面にも違いが認められる。

珠文鏡は樋口隆康氏の研究によると、6種類に分類され、これに従えば本例は、I類に属するものである。おおよそ、5世紀後半～6世紀代を中心とした時期の古墳に見られるが、I類の出土古墳には大阪府・御旅山古墳、弁天山B4号墳、長野県・川柳将軍塚古墳、II類の出土古墳には横浜市・加瀬白山古墳などの名が見られ、これらの古墳は比較的古い時期の古墳で、4世紀末に遡る時期のものも存在する。

徳島県・曾我氏神社古墳からは、内区に珠文が一列巡り、外区に櫛齒文、鋸齒文をそれぞれ配した珠文鏡が出土している。これには川西編年のⅡ期に比定されるA種ヨコハケをもつ円筒埴輪が確認され、副葬品に新式の石劍が伴出し、4世紀後葉の年代が与えられている。

従って、本古墳出土の珠文鏡の年代は、珠文鏡の中での厳密な位置付けがされなければならないが、珠文鏡という大きな枠の中で捉えた場合、その上限を4世紀後葉前後まで遡らせることも可能といえよう。

玉類は、埋葬当初の姿にないことは明らかであるが、それでも管玉、小玉、丸玉などが発見されている。組合せは出土数量から推測すると管玉を中心として、小玉、丸玉が伴うものと考えることができよう。この組合せは、勾玉の有無が不明としても珠文鏡出土古墳の古い時期の例としてあげた曾我氏神社古墳、川柳將軍塚古墳、加瀬白山古墳にも認められる組合せであり、一般的に古式古墳に埋葬される形を示している。

管玉の穿孔方法は、発掘品はすべて両面穿孔であった。過去のものの穿孔方法が不明であり、また、稀少からくる偶然性もあるが、基本的には両面穿孔であったと推定できよう。

県内の前期古墳出土の管玉で、穿孔方法の明らかなものに大丸山古墳、亀甲塚古墳出土品がある。前者はすべて両面穿孔であるのに対し、後者はそのほとんどが片面穿孔と見られるもので穿孔方法からは大丸山古墳に近いことになる。

穿孔方法については、川西宏幸氏が円筒埴輪の編年的研究を展開する中で、円筒埴輪第Ⅱ期にそれまでの硬玉製勾玉の両面穿孔に加えて、片面穿孔の製品が加わり、かつその時期が4世紀後葉であると指摘している。本古墳出土の玉類は、種類こそ違うものの穿孔方法には一脈通じるものがあり、4世紀後葉ごろまで遡った年代を推定することも可能といえよう。

材質の面から見てみると、本古墳出土例は管玉、小玉とともに緑色凝灰岩製品であった。県内の前期古墳出土の玉類の材質は、大丸山古墳では碧玉製管玉、ガラス製小玉、銚子塚古墳では碧玉製管玉、水晶・碧玉・硬玉製勾玉、亀甲塚古墳では碧玉製管玉が知られている。従って、本古墳と大丸山古墳、銚子塚古墳、亀甲塚古墳との玉類の間には、材質の面で大きな違いが認められることになる。この違いが大丸山古墳、銚子塚古墳、亀甲塚古墳が県東南部に所在するのに対し、本古墳が2大河川をはさんで県西部に所在するという地理的条件による地域差なのか、年代差によるものか、あるいは被葬者の系譜関係ないし他集団との結合関係による性格の違いからくるものかは、今後明らかにされてくるであろう。

また、凝灰岩製の玉類は曾我氏神社古墳の中にも見られるが、三重県・石山古墳、岐阜県・長塚古墳などの玉類の中にも見られ、この時期から出現してくる石材とされている。これらの古墳は、いずれの地域においても古式古墳に位置づけられているものである。

従って、玉類の検討からは組合せ、穿孔方法、材質のいずれの面からも本古墳例

が古い時期まで遡ることが指摘できるものといえる。

武器類は剣と直刀とが出土している。本県において剣を副葬した古墳は、それほど多くない。古墳時代後期の初めころまで存在するがごく僅かで、そのほとんどが前期古墳に属するものである。この中で本古墳の剣副葬数は大丸山古墳9口、王塚古墳5口につぐもので、銚子塚古墳3口と並ぶ量のものというところに特徴がある。一般的に武器の大量の副葬化が始まるのは4世紀後半ごろのことと考えられている。大丸山古墳、銚子塚古墳は、まさに、この変化を示している古墳であり、短剣と長剣とを副葬している。一方、王塚古墳例はすべて長剣であり、やや下降するものといえる。やや横道にそれるが、この年代差は円筒埴輪の差からも肯定されるもので、銚子塚古墳の円筒埴輪にはA種ヨコハケ、王塚古墳の円筒埴輪にはB種ヨコハケが認められるものである。本古墳の剣も形態の面からの検討が必要といえるが、形態の判るもののがなく不可能な状況にある。

武器類については形態からの検討などにお検討を必要とするものの、武器の大量副葬化の所産によるものと推定できよう。

さて、副葬品について若干の検討を行ってきたが、総体的な副葬品の組合せは農・工具類の存在が不明であるにせよ、比較的古い組合せを示しており、鏡、玉類、武器類などの個々からは更に古い時期が推定できた。当然、古墳の立地形態、古墳の埴丘形態、内部施設の形態などを併せて検討が必要であるが、副葬品のうち特に玉類、武器類などからは、4世紀後葉前後まで、その年代を遡らせることが可能である。

(坂本美夫)

参考文献

甲斐古墳調査会『甲斐の古墳』I 1974

上野晴朗「山梨県甲府市伊勢町遺跡調査概報」『甲斐史学』7 1959

拙稿「山梨県における古墳（首長權）の展開」『シンポジウム—古代甲斐国を考える』 山梨県考古学協会 1982

樋口隆康『古鏡』1979

天羽利夫他「曾我氏神社古墳群調査報告」『徳島県博物館紀要』第13集 1982

三木文雄「大丸山古墳一新稿」『中道町史』1975

拙稿「山梨縣・曾根丘陵周辺地域の前期古墳等について」『甲斐考古』別冊第2号 1978

川西宏幸「円筒埴輪總論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978

今井 勤「古墳の副葬遺物」『考古資料の見方(遺物編)』地方史マニュアル6 1977

VIII おわりに

今回の調査はあくまでも物見塚古墳の保存をはかるべく、環境整備のための資料調査として、古墳の範囲、古墳の形態、すなわち前方後円墳であるのか否かということ、葺石、埴輪、周溝等の施設の有無、また主体部の確認などを目的とした最小限の発掘調査であった。

調査の結果、ある程度所期の目的を達することができた。すなわち、円丘東側の矩形の高まりは自然丘ではなく、葺石の配された前方部であることがほぼ確定でき、全長およそ48m前後の前方後円墳であると推定された。また、埴輪、周溝等の施設はみとめられなかった。主体部は盗掘擾乱が顕著であったが、堅穴式石室の痕跡はみとめられず、粘土郴の可能性をうかがわせた。擾乱土中から直刀あるいは刀子の破片、鉄劍3口分の破片、管玉、小玉などが出土したが、これらは副葬品であると考えられる。いずれも前期古墳の副葬品の特徴であり、新しい様相のものはみられない。坂本氏の副葬品の検討より4世紀後半頃の年代が考えられる。古墳自体も後円部に比して前方部の低い古式古墳であり、その築造年代はおそらく4世紀後半より5世紀前半頃と推定される。

したがって、物見塚古墳は現在甲府盆地の西部、とくに釜無川西岸に位置する唯一の前方後円墳であり、しかも前期古墳であるので、甲府盆地の東部の東八代郡中道町に所在する県内最古の古墳群（大丸山古墳、銚子塚古墳、丸山塚古墳等）との関係が注目される。

物見塚前方後円墳の築造は滻沢川、秋山川等が釜無川に注ぐ地帯を生産的基盤として、市之瀬を中心とする櫛形、甲西町付近に、中道地区に対抗する政治的勢力が出現したことを意味するものと考えられる。

このように甲府盆地の古代史を考える上できわめて重要な古墳であり、史跡として永く保存される価値は充分である。

今回の調査にあたって別記の多くの方々、諸機関より、言葉に言い尽せぬほどの御援助をたまわった。ここで改めて調査団を代表して厚く御礼申し上げる次第である。

（松浦有一郎）

物見塚古墳環境整備調査委員会

委員長 上田幸卉（町教育長）

副委員長 斎藤静馬（町文化財審議委員会会長）

委員 浅野貫一（町文化財審議委員会委員）

石川徳広（ “ ” ）

杉山人才（ “ ” ）

常盤鶴義（ “ ” ）

横内重孝（郷土研究部部長）

功刀 博（ “ 副部長 ” ）

杉山賢吾（ “ ” ）

入倉東洋（ “ ” ）

小泉鉄夫（農地開発公社常務）

松浦有一郎（調査団団長）

事務局長 小林喜也（町教育次長）

事務局員 鶴田一雄（町教育委員会）

横内広記（ “ ” ）

石川利夫（ “ ” ）

物見塚古墳発掘調査団

団長 松浦有一郎（横浜国立大学講師、自由学園講師）

調査員 新津 茂（上智大学卒業生）

森田久男（法政大学卒業生）

渡辺健二（日本大学卒業生）

山下孝司（琉球大学卒業生）

調査指導 新津 健（山梨県文化課）

坂本美夫（ 同 ）

調査参加者 斎藤静馬、横内重孝、杉山人才、功刀 博、功刀 隆、河西一郎
秋山一郎、清水義則、清水市平、東条博道、横小路九万、川崎一徳
杉山賢吾、野中芳吉（柳形町郷土研究会）、五味研治（東海大学学生）
高橋勝保（東洋大学卒業生）

調査協力者 森 敏和、末木 健、米田明訓、八巻与志夫、山路恭之助、今井正文
寺内敏郎、櫻山和枝、小峰 均

物見塚

——山梨県中巨摩郡柳形町所在

古式古墳発掘調査報告書——

昭和58年3月31日発行

編著者 物見塚古墳発掘調査団

(団長 松浦有一郎)

発行者 物見塚古墳環境整備委員会

(委員長 上田幸一)

柳形町教育委員会

印 刷 第一法規出版株式会社
